

秋植え野菜**驚き**の秘策

ひと皮むくだけで、劇的効果！

ニンニクのつるつる植え

「ニンニクの種球は薄皮をむかずに植えつける」というのが常識ですが、木嶋博士は皮をむいて、つるつるの状態です。ひと手間かけるだけで、生長が早くなり、病気にも強く、球はびっくりするほど大きく育ちます。

栽培指導●木嶋利男 取材・文●三好正人 撮影●若林勇人 イラスト●若松敦

ここがすごい！

- 一 球の肥大が促進される
- 二 病気に強くなる
- 三 適期に遅れても植えつけ可能

理論編

水をはじく皮を取り除いてスタートダッシュ！

「ニンニクの薄皮をむいて植えつけると生育がよくなる」と聞くと驚かれる方がほとんどではないでしょうか？

種球（鱗片）を覆う薄皮は保護のためのもの。そう考えると、種球をむき出しにして、植えるのは、傷みやすそうで、ちょっと怖い気もします。

木嶋博士は「皮の主な役割は保存時の種球の保護」と言います。皮は水分をはじくので、ニンニクをつるして保存するときなどは、種球を保護してくれます。ところが、皮を付けたまま種球を植えつけると、土中の水分を吸いにくく、それだけ発芽が遅くなります。皮をむいてつるつる植えにすると、発芽が数日～1週間早くなり、その後も生育が早く、充実した株で冬越しができ、最終的に収穫する球（鱗茎）も大きく育ちます。



秋植え野菜
驚きの秘策

ひと皮むくだけで、
劇的効果！
ニンニクのつるつる植え

「ニンニクの種球は薄皮をむかずに植えつける」というのが常識ですが、木嶋博士は皮をむいてつるつるの状態です。ひと手間かけるだけで、生長が早くなり、病気に強く、球はびっくりするほど大きく育ちます。

栽培指導●木嶋利男 取材・文●三好正人 撮影●若林勇人 イラスト●若松敦

さらには、病気にも強くなります。植えつけ適期の9月は秋の長雨の時期。水はけの悪い畑などでは、発芽まで長く時間がかかると、その分、春腐病などの病原菌に感染しやすくなります。つるつる植えは早く発芽するだけでなく、ニンニクに多く含まれるアリシンの殺菌作用が周囲に及びやすくなります。

また、早く発芽する性質を利用すると、彼岸過ぎの遅植えも可能です。温度が下がっているため、病原菌の感染はより少なくなります。もちろん、植え遅れた場合の裏技としても、つるつる植えはおおいに有効です。

実技編

薄皮をむくのは、植えつけの直前に

point 皮をむいたらていねいに植える

「皮をむいた場合、水はけが悪くて、肥料分が多い土だと、病気にかかりやすくなります。畝の高さは10%程度とり、種球1～2個分の深さに植えつけます。植えつけ時には種球を傷つけないように注意します」

皮のむき方、

早くから皮をむくと種球が乾燥するので、植えつけの当日か前日に行う。薄皮はむきにくいですが、爪などで表面を傷つけないようにていねいに。とくに、先端の芽やその反対側の根が出る茎盤が傷むと、生育に影響するので注意する。

検証編

ふた回り大きなサイズの球がずらり！ よく肥大し、大きさもそろろう

冬越し後、つるつる植えと普通植えの生長には、葉の枚数や伸び方に若干の違いがある程度。差はほとんどなくなります。

ところが、球を掘り上げてみると、その差にビックリ！ つるつる植えは明らかにふた回りほど大きく、しかもどの株も大きさがそろっています。収穫時期が少し遅かったせいも、外皮をむくと分げつが進んでいて、鱗片の数で比較しても、つるつる植えはかなり多くとれることがわかりました。

つるつる植えは発芽が数日～1週間程度早い分、その後の生長にもそれが現れて、球がより大きく肥大したと考えてよいでしょう。もう一つ



つるつる植えのニンニク。この大きさは予想以上。手のひらに収まらない。光合成によって地上部でしっかり養分が作られ、それが球に運ばれた証拠

の特徴は、つるつる植えはより健全にたくましく育ったことです。葉や茎の傷みも少なく、安心して育てることができました。

違いは、種球の皮をむくという、ひと手間だけ。それで途中の生育から収量まで大きく変わる、まさに驚きワザです。

▶つるつる植え

球の大きさにはびっくり。普通植えよりも、ふた回りほど大きい。根の多さ、たくましさにも注目。傷んだものもなく、大きさがそろっていることにも驚く。内部では分けつが進み、鱗片は19個と、普通植えの約1.5倍。

▶普通植え

おおむねよく育っているが、大きさにばらつきがみられ、ばらつきがある。内部の鱗片は平均10個程度。一般的な栽培方法では、これでもじゅうぶん合格。

さらにひと工夫！

凄ワザ1

小さな種球は2球植えて

植えつけには、大きく充実した種球を使うのが基本です。もし、小さな種球があったら、2球をまとめて植えると、助け合って根を伸ばし、大きく生長して、それぞれの株でまずまずの球が収穫できます。種球を接して植えても、できる球が変形することはありません。

なお、同様の栽培方法はニンニクと近い仲間のタマネギやラッキョウなどでも行えます（タマネギは、細い苗）。なお、ラッキョウの場合は、莖盤から鱗茎を離してバラバラにしてから2球植えにしないと、花が咲きやすくなってしまいます。



凄ワザ2

むかごから育てる

ニンニクは5月ごろになると、花茎が伸びてきます。残しておくと花が咲いて、養分が取られるので、通常は花茎が伸びた段階で切って、茎ニンニクとして食べることもできます。

しかし、株を増やすには、花を咲かせて、できるむかごを利用する方法があります。花が咲いたあと、1か月ほどでむかごの状態になります。これを種球として植えつけ、翌年球を掘り上げたあと、さらにそれを9月に種球として植えつけると、翌年にはじゅうぶん収穫できる大きさにまで育ちます。時間



はかかりますが、株の性質が畑の環境になじんできて、よく育つようになります。

凄ワザ3

収穫後は、茎を付けて乾かして 球を充実させる

ニンニクの収穫の目安は葉がほとんど枯れたときです。茎はまだしっかりしているので、付けたままで収穫します。完全に枯れた葉は整理し、茎は長く残して、束ねて干します。軒下などの日光が直接当たらず、風通しのよい場所がいいでしょう。収穫後も茎にあった養分が球に転流して充実し、ニンニクの風味が増し、よりおいしくなります。また、よく乾燥させることで、長期保存が可能になります。



『やさい畑』2015年秋号